

琉球大学学術リポジトリ

[創立35周年に寄せて] 沖縄農業研究会における活動の思い出

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡嘉敷, 義浩, Tokashiki, Yoshihiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015484

6. 沖縄農業研究会における活動の思い出



渡嘉敷 義 浩

(琉球大学農学部)

沖縄農業研究会は、昭和37年度（1962年）5月に設立されて以来、平成9年度（1997年）の今年で35周年の節目を迎えるとのこと、本研究会のご発展に対してお祝い申し上げます。そして、沖縄県内における農畜林産業の活性化に対して、今後も益々、本研究会のご活動を通じて多大の貢献をして下さることを期待しております。さて今回、『沖縄農業研究会設立35周年記念誌』への「35周年に寄せて」という寄稿依頼を受け、自分自身、研究会活動を思い出す機会が与えられて喜んでおります。いろんな思い出がありますが、そのような中から、1) 研究会活動を運営する会計係として関わったこと、2) 研究会活動の活性化を語る懇談員として関わったこと、二つの思い出を述べてみたいと思います。

1) 会計係としての思い出

ある日突然、沖縄農業研究会の幹事の一人から、「会計係に推薦されたので宜しく頼む」と押し付けられたことが思い出されます。”押し付けられた”という表現は、こちらには何の相談も了解もなかったわけですから、当時を思うと、まさにその通りの印象が残っています。そのやり方の強引さには呆れてしまいましたが、研究会の正会員である以上は止むを得ない面もあるかなと、しぶしぶながら引き受けたことが思い出されます。

そのような経緯はいずれにせよ、研究会の台所を預かる会計係を引き受けて後は、真っ先にやらなければ

ならないことが何かを考え、自分なりに次のような考えに達したことが思い出されます。すなわち、地域に設立された研究会は、参加する全会員に対してその会の活動状況を伝達し、各会員相互間の情報交換や各会員の研究活動を支援すること等を目指しているに違いないこと。そして、研究会の発行する雑誌を通じて各会員の研究成果を公表し、また毎年の定期的な研究会や関心事のシンポジウム等を開催して、地域社会に貢献することを目指しているに違いないこと。そのような研究会の趣旨を実現して円滑な運営を行うには、その組織の構成員である会員名とその人数、各会員の払う会費やその他の収入等を含めた全収入に基づく活動資金を把握する必要があることなどでした。

その作業に取りかかってみた時、まずは、信じられないような愕然とさせられる状況に直面してしまったことがありました。それらは次のような”けじめのない状況”だったことでした。会員名簿にはあいまいな不明瞭さがあって充実してなく、正会員の会費徴収や正会員への事務連絡等が円滑に出来ないこと。名簿に記載されてはいるが、すなわち正会員ではあるが、数年間も会費を納めない会員がいること。そして、それらの会員にも会誌「沖縄農業」を郵送したり配布したりしていること。さらに、評議員会や幹事会等の役員名簿には記載されていないが、会員名簿には記載されていない、すなわち正会員でない役員がいること等々。

当然予想されることながら、そのような会員名簿に基づく研究会の収入は不安定であり、足の地についた

研究会活動を円滑に継続するには大きな不安を感じておりました。そこで、会計係として真っ先に改善を要する課題は「正会員名簿の充実」をはかり、「会費の徴収」を確実にし、研究会の運営を円滑に継続していくように、その正会員に「会誌の配布」を確実に行うこと等であります。「正会員名簿の充実」を目指した会計係としての作業は、多くの会員の皆様のご理解とご協力を得て徐々に進められ、任期中にかなりのところまで整いましたがまだ不十分でした。しかし、幸いにも、小生が先鞭をつけた重要なその課題は、その後の会計係によってさらに充実したものへと引き継がれて達成され、現在の立派な正会員名簿が整えられているように思います。後を引き継いで正会員名簿を整備し充実させて下さった会計係の皆さんに感謝申し上げます。

2) 懇談員としての思い出

いつの頃だったか、有志による研究会活動の活性化を語る懇談会への誘いを受けたことが思い出されます。その頃は、研究会の活動があたかも倦怠期に陥っているような一時期だったように思います。数人の会員や仲間が琉球大学農学部の演習室に集まり、茶菓子をほうばりながら、ジュースやコーヒー等の飲み物も飲みながら、“今後の沖縄農業研究会活動の活性化を図るにはどうしたらよいか”を懇談テーマに、自由に意見を述べ合った時期がありました。そして、その懇談会が済むと決まって大学近くや那覇の居酒屋やスナックへ出かけ、熱を帯びた話しを続けながらも最後にはカラオケを楽しんだことを思い出します。それらの店では、参加者の持ち歌を適当に歌い終わると、店を出る前に最後には決まって「サトウキビの歌」なるものを数人で歌ってその懇談を閉めていました。その頃はすっかりその歌の虜になってしまい、とうとう作詞までして歌うようになってしまいました。現在も機会あるごとにその歌をよく歌っておりますが、沖縄農業研究会の“逍遙歌”にでもなってくれたらと内心で期待しつつ、この機会にその歌詞を紹介させていただきます。

「サトウキビの歌」

原作詩：川満 芳信（改編・作詞：渡嘉敷義浩）

『演歌「兄弟船」のメロデーにのって、皆で、

おおらかに歌いましょう!!』

1. 真夏（なつ）の畑で サトウキビが
その葉を巻いて 立っている
サトウキビはヨー 雨水（あまみず）しだいさ
値段も安いが 干魃（ひでり）に弱い
心細いとヨー それに散水（みず）をやる
2. 列に並んで サトウキビが
ミーニシ吹くなか ゆれている
サトウキビはヨー 家族（みな）の宝さ
値段は安いが 台風（かぜ）には強い
力あわせてヨー それを刈りあげる
3. ダンプ一台 サトウキビが
三日がかりで 刈りあがる
サトウキビはヨー 曲がりくねってさ
値段も安いが 作業はきつい
カマをおいてヨー それを積みあげる

いずれにせよ、その頃の懇談会で話題になった多くのことが、研究会のその後の活動に活かされているように思います。例えば、庶務係による円滑な正会員相互間への事務連絡、会計係による会費の確実な徴収や広告料と委託研究費の多数の受け入れ、編集係による会誌「沖縄農業」の表紙や内容等の体裁の様変りと整備、内容面での充実度の向上に加え、さらにシンポジウムや地域懇談会の企画と開催等、多くの会員による研究会の活動が徐々に活性化している印象を受けることです。今後も、地域に根差した沖縄農業研究会の活動が益々活発に行われ、さらに地域農業の発展に益々貢献することを期待して、思い出話を終えたいと思います。